
喫茶店セレナ

相模 怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶店セレナ

【Nコード】

N2764H

【作者名】

相模 怜

【あらすじ】

天界という人間界とは異なる空間に存在する異世界の住人、天使。それは人を助けるのではなく、悪魔を浄化し魂の輪廻転生を行うもの。そして漆黒の翼をもって生れたために天界からうとまれてきたセレナがたどりついたのは、人間界だった。セレナの人間界での生活を描いた物語です。お暇な方はどうぞ。

夏のある日（1）

「夏といえば休暇。バカンスだよ！」

がたん、といすを蹴っ倒して立ち上がり、少女はこぶしを握りしめる。

「暑い日にはかき氷とかアイスで心を癒すのもいいけど、仕事ばかりしてちゃ休まるものも休まないよ。世間様はもう夏休みなんだからこんなに一生涯懸命仕事している勤労意欲の塊である私が、休暇を取ったとしてもだれも文句は言わない。いや寧ろ、君はもっと休むべきだ、働きすぎだって口を揃えて言うだろうね。ね、そう思うだろう？^{みな}水無くん」

水無と呼ばれた、こちらも少女が、グラスをふく手を止めて得意げに熱弁を振るう少女に視線を向けた。

熱弁を振るっていた少女の見た目は16、7歳だろうか。金色の髪にサファイヤのような青い瞳。全身黒で統一した服からは、細い手足が伸びている。快活そうな目は、今は獲物を見つけた猫のようにらんらんと輝いていた。

「思いません」

水無はそれを冷めた目で見やり、ぱっさりと切り捨てる。

「えー、どうしてさ。水無だって働いて疲れているだろう？仕事は休むことも必要なんだよ。じゃないと効率が悪いし、何よりいい仕事ができない。これでも私は水無のことを考えて言っているんだよ？」

セレナはにっこりと笑うと、水無の肩をポンポンと叩く。水無にはその手がずっしりと重く感じられた。

「…誰の所為で休みが取れないと思ってるんですか。休みが取りたくても取れないのは、あなたが毎日仕事もせずぐーたらとしているからでしょう。私のことを考えてくれるのなら、少しは仕事をしてください」

「しているじゃないか。私は勤労意欲の塊だよ？」

「今月になってからまだ一回もしてないじゃないですか。店の仕事も全部私に押しつけて…。それでも、もしあなたが勤労意欲の塊だというのなら、完全に意味をはき違えています。無為徒食の間違いないじゃないんですか？」

「そんなことはないさ。仕事が来ないのだから、したくてもできないだけだよ。ああ、私はこんなに働きたいと思っているのに…！世の中はなんて不公平なんだろうね」

少女はしれっとした顔で大袈裟にため息をついて、カウンターの席

に座り直す。

水無はカウンターを挟んで目の前に座り、大量の旅行パンフレットを熱心に読んでいる少女を見て小さくため息をついた。

少女の名前はセレナ・レヴィン。一見17歳ぐらいの少女にしか見えないのだが、その実年齢は三百歳を超える天使なのだ。何でも天使なのに翼が黒かった所為で殺されそうになり、天界からこの人間界に逃げてきたらしい。

天使にも人間と同じように社会があり、仕事もある。そしてそのおもな仕事というのが悪魔退治というおとぎ話のような仕事だった。

「悪魔退治といっても、人間のエクソシストがするのは少し違うかな。魂を回収することを目的としているからね。正確には悪魔の定義も違うんだけど、まあそこはいいかな。とにかく魂を回収して輪廻転生をさせること。これが天使の仕事だよ」

悪魔退治について水無が聞いたら、セレナから返って来た答えだ。だから別に天使といったって、人を助ける存在じゃないのだ。そう言っていた。

水無は小さい頃に両親を亡くしたのだから、その時偶然か必然か悪魔に襲われたところをセレナに助けられたことがある。

その時のセレナは、今目の前で仕事もせず旅行パンフレットを楽しそうに読んでいる彼女からは想像もできないほど神々しく、とても綺麗に見えたのだ。

漆黒の翼でも天使に見えるほどに。

だからその時勝手に口が動いてしまったのかも知れない。弟子にし

てください、と。

今考えれば何を血迷ったことを言ってしまったんだと頭を抱えるほどの発言なのだが、当時の水無は本気で言っていた。どうせ身寄りもなかったし、何よりセレナの能力に完全に魅入られてしまっていたから。

水無は丁寧に拭いたグラスを片づけながら店内を見回す。

店内は三十人は余裕で入れるぐらいには広い。机や椅子も雰囲気がいいものばかりで、水無が毎日掃除しているので店内は綺麗だ。

そして驚くことにこの経営者はセレナで、セレナの家でもある場所だった。

例えば中身が三百歳で天使だとしても、外見は少女にしか見えないセレナがどうやってこれだけの店を手に入れたのか水無は不思議に思う。そう簡単に手に入れられるとは思えないからだ。

…世の中はそんなに甘いものじゃないと思う。

「ねえねえ水無はどこ行きたい？暑いから私は涼しいところがいいんだけど、暑いからこそあえて暑いところに行くっていうのもいいかもしれないよね。例えば……ハワイとかグアムか。エジプトやインドにも行きたいと思ってたんだよね。ね、ね、水無はどう思う？」

水無は目の前にあるグラスを投げつけたい衝動をどうにか抑え込みながら、努めて淡々となるように言葉を紡いだ。

「師匠… いったいどこにそんなお金があると思っっているのですか…」

「？」

「え？ないのかい？」

セレナはさも驚いたというように目を丸くする。

「無いに決まっているじゃないですか！外国どこか国内旅行だつてしている余裕はありませんよ。それどころかこのままじゃ、日々の生活すら危ういんです。そんな戯言たわごとぬかしている暇あったら、仕事をしてください！」

水無の剣幕に、セレナは首をすくめる。

「わかった、わかった。そんなに怒らないですよ。冗談だよ冗談。海外なんて行かないって。やっぱり暑い時に暑いところに行くのは得策じゃないよね。だからさ、北海道なんてどうかな？涼しいし、名産品は多いし。なによりラーメンが美味しいらしいしね。一度食べてみたかったんだよね。ね、いいと思うでしょ？」

「……………」

言いながらセレナは「北海道」とでかでかと書いてあるパンフレットを水無に見せ、説明をし始める。

……………全然人の話を聞いてない。

水無は強いめまいを覚え、目元を押さえた。

思えば初めて会った時から、セレナはあんまり人の話を聞いてなか

った気がする。しかも悪魔退治というお客が来るんだかどうかも怪しい仕事すらせず、毎日だらだらと過ごしている始末だ。そのくせ何かというと休暇だの旅行だの言っ、遊びに行こうとする。その常識を遺脱した性格は、天使だからなのか元からなのか。

…まったく、昔弟子にしてほしいと言った自分自身を呪ってやりた
い。

水無は再度ため息を漏らすと、諦めたようにセレナを見やる。

「…分かりました。休暇を取ってもいいことにしましょう。師匠は一度言いだしたら聞かないですから」

「本当かい？ やったー！ じゃあ」

「ただし、 今日一日だけです」

午後の日差しが照りつけるお昼時の「喫茶店セレナ」の店内で、パンフレットが床に落ちるバサツという音が、やけに大きく響いた。

夏のある日 (2)

そして同日の午後六時。

夏なのでまだ空は明るく、気温もなかなか下がろうとはしない。ねつとりと汗が肌にまとわりついて気持ち悪い中、セレナはせっせと花火の準備をしていた。

「喫茶店セレナ」の裏には、手入れの行き届いた裏庭がある。その手入れはもちろん水無がやっていて、花壇にはいつも季節の花が咲いている。そして雑草もきれいに取り払われた地面には、今は大量の花火が転がっていた。

「はあ…休暇が取れたのは良かったけど、まさか一日だけとは…。水無もほとんど休みに関しては厳しくなってくるし。これじゃ体もたないよ」

ぶちぶちと文句を言いながらも、セレナの花火を準備する手は軽やかだった。例えば一日だけでも容認された休みがとれるのがうれしいのだ。普段はごろごろしていると、すぐに文句や嫌みがとんでくるのでかなり居心地が悪い。もちろん全面的にセレナが悪いのだが、そこは気付かないふりをしてやり過ごしているセレナだった。

「仕方ないと思うけどね。セレナがそんな態度とってるわけだし。ボクは水無がかわいそうでしかたないよ」

「むう。シイは私の使い魔のくせに水無の味方をする気？この、裏

切り者」

「別に裏切ってないよ。契約の中には必ずセレナの味方になるように、なんて入ってなかったし。それにボクは本当のことを言っただよ」

セレナの隣で白い羽の生えた黒猫が、ふいっとそっぽを向いた。

シイと呼ばれた黒猫が金色のリングのついた尻尾をゆらゆらとさせながら、前足で落ちている花火を転がす。

今セレナとしゃべっていたのはこの黒猫なのだが、セレナは特に驚いた様子もなく口をとがらせる。

「屁理屈者」

「どつちが。正直者といってほしいね」

シイはルビーのような赤い目をすぼめて、セレナを見返す。セレナはふん、とそっぽを向いた。

シイはセレナが天界にいたところに契約した使い魔だ。使い魔は普通天使と契約する際、名前と誓いを立ててもらう代わりにその契約者には絶対服従なのだが、シイは違った。気さくといえれば聞こえはいが、要は主人に意見もするし反抗もするという、使い魔としては何とも扱いづらい奴だった。

しかし天使に対してそれだけの態度がとれるのは、能力が高い証拠でもある。天使は複数の使い魔と契約することができるのだが、実際セレナにはその能力があるのだが、それをしないのはシイの能力

が強いので必要ないということもあった。

「水無には本当のこと言っただけあげたほうがいいんじゃないの？このままだと、セレナは誤解されたままだよ」

シイは淡々とした口調で言う。

使い魔と契約者の間には特に互いに干渉してはいけないという掟はないが、普通はお互い干渉し合わないのが暗黙の了解になっている。シイは天界でも珍しいくらいにセレナに干渉しているのだが、それはセレナが立てた誓いの所為でもあるのかもしれない。

「……………さて、何のことやら。私はいつでも本音しか言っていないよ」
セレナはそう言うのと、にっこりと笑みを作った。

「……………」
「よし、出来た」

セレナは自分の足元に並ぶ筒を見て、満足したように頷く。後は火を付けるだけだ。
手で持つ普通の花火と違い、筒状の物は他の物より値段が高い。お金に余裕がないのでそんなには買えなかったが、十個ほど買えれば十分だろう。

昼間のうちに水無に着付けてもらっていた青い浴衣の袖でパタパタと自分を扇ぎながら、セレナはもうすぐ沈むであろう夕陽を眺める。

天界にも太陽はあったのだが、日が沈むということがなかったのだから、セレナはこの瞬間が好きだった。人間界に来てもう何十年も経っているのだが、未だにこの夕焼けの景色だけは飽きない。

「にしても、……暑いなあ」

浴衣の袖の扇ぐスピードを速めながら、セレナは独り呟く。

天界では夕日もなかったが、暑さや寒さといったものもほとんどなかった。特に天使自身そういうものは感じないのだが、今は人間のふりをしているのでそうもいかない。

「寒いのはまあなんとかなるけど、暑いのは辛いよ。食べ物も食べなきゃ死んじゃうし、人間って大変だよな」

天界には食べ物もなく、天使は空腹で死んだりはしない。それが当たり前なセレナにとっては、それすらもなんだか新鮮な感じだった。

「？ シイ？」

シイに同意を求めたのだが返事が返ってこなかったのだから、不審に思い隣を見ると、漆黒の毛がかすかに逆立っていた。

「……どうしたの？」

「分からない。ただ、どうも嫌な感じがする」

シイは赤から紫色に変わっていく空を睨みつけながら答える。

セレナは警戒しつつも、シイが睨みつけている空の方を見ようと視線を上に向けようとした瞬間、視界の隅に白いものが映った。

「あ」

「やあ、久しぶり。セレナ。相変わらずの呆けた顔、よく似合ってるよ」

にっこりと微笑みながら白い羽を生やした天使、リオ＝ラズバートはそう言って「喫茶店セレナ」の裏庭に降り立った。

「あああああああああああああああああああ！」

「さっそく歓迎、ありがとう」

「してないよ！」

セレナはあらん限りの怒声で否定する。

「てゆうか、あんたが何でここにいるんだよ！帰れ！今すぐ故郷へ帰れ！ついでに土にも返れ！」

「セレナ。あんまり怒鳴ると顔がタコみたいになって、面白い顔が

さらに面白くなるよ」

「うるさいわ！余計なお世話だ！」

リオはくすくすと笑いながら、肩をすくめる。

水無に対していた時とはかなり違い怒鳴り散らすセレナに、シィは苦笑を禁じ得なかった。

リオはセレナの幼馴染で天使だ。群青色の髪に、夕焼け空のようなオレンジ色の瞳。整った顔立ちで、外見はセレナと同じ十七歳ぐらいに見える。

天界では嫌われ者だったセレナに唯一話しかけてきた、本当だったら感謝してもいいくらいの相手なのだが、セレナは会うたび罵倒してしまう。

会うたびに笑いながら嫌みとしか思えない毒舌をふるうリオの所為でもあるのだが、それだけではなかった。

…なんか、無性に腹が立つ。

天界にいた時もそうだったが、リオといるとセレナは腹が立ってしかたがなかった。

人を馬鹿にしているような笑みも、セレナの過去を知っていると事実も、全てがセレナにとっては気に入らなかった。

「……で？何でリオがここにいるの？」

セレナは努めて冷静を装って聞く。気温が五度は上昇したんじゃない

いかといつくらい、じりじりと暑く感じる。

「なんでって、花火をやるんだろう？俺も参加しようと思ってね。ほら、こっやって花火を持参してきたじゃないか」

そう言ってリオは両手に持っている花火を見せる。

「……あんたを呼んだ覚えはないんだけど」

「もちろん呼ばれた覚えはないよ」

「開き直んな！」

セレナは手元にあつた花火の袋をリオに投げつける。

リオはそれをひよいつとかわす。

シイはそんな二人の光景を無言で眺めていたのだが、ふと疑問に思ったので口を開いた。

「ねえ、リオは別に人間のふりしてるわけじゃないんでしょ？何で花火なんか持つてるのさ。…お金とかどうしたの？」

普通天使は、悪魔退治以外で人間に干渉することはできない。というのも、その存在が人間にはほとんど認知されないからだ。そんな幽霊みたいな天使が、誰からも認知されるようになるには同じ人間

のふりをするしかない。人間の格好をするだけでなく、存在そのものを人間と同じにするのだ。

もちろんそんなことは誰にでも出来るわけではなく、一部の能力の高い天使にしかできない。リオはエリートで、セレナもそれに近いくらい能力が高いので出来るのだが、リオは今天使の姿だった。

「そうよ。天使のあんたに買い物なんか出来ないでしょ。いったい……あ、まさか、盗んだの？」

「はは、まさか。そんな大層なことはしてないよ。ただちょっと借りてきただけだよ。…まあ返すつもりはないけど」

リオはにっこりと、同然のように言う。

「…そういうの世間では窃盗っていうんだよ。この、犯罪者」

「別に俺、人間じゃないから関係ないし。それよりさ、やるんだろ？花火。夏だから花火っていうのは単純だけど、金欠のセレナにはちょうどいいよね」

そう言いって微笑しながら、花火の袋を開けにかかるリオ。そう言うものいいがセレナをさらに苛立たせるのだが、それを知ってか知らずか当の本人は素知らぬ顔だ。しかしその笑みはセレナを馬鹿にしているというよりも、ただ単純に楽しんでいるようにシイには見えた。

実際セレナは否定するだろうが、リオはかなりセレナのことを気にかけていると思う。本人は何も言わないが、影ではセレナを助けていることもシイは知っていた。

リオが天界ではエリートであったにも関わらず、天界から逃亡したのは多分そのためだろうと思う。

セレナを守るため。あるいはそれに準ずる援助行為を行うため。本当の理由は本人から聞いたわけではないので分からないが、少なくともシイはそう考えていた。そうじゃなければ特に呼んでもいないのに、わざわざセレナの様子を見に来るようなことはしないはずだ。

「 師匠、あの、その方は？」

振り向くと後ろには水の入ったバケツを持った水無が、突然の訪問者に困惑した表情で立ち竦んでいた。

「……………」

「やあ、こんにちは。いや、もうこんばんはかな？俺はリオ。リオ
「ラズバート。セレナの幼馴染だよ」

ぶすつとして答えないセレナに変わって、リオが代わりに自己紹介をする。

水無はぺこりと頭を下げた。

「はじめまして。水無です。あの、師匠と幼馴染ということとは……………」

「うん、天使だよ。でも大丈夫。俺も天界からは逃亡してきたから、追われてる身だよ。今日は花火やるんでしょ？だから混ぜてもらおうと思っただけだよ」

「…ええ、まあ……」

水無はリオの言葉に少しほっとしながらも、複雑な気分だった。

別に花火はやりたくてやっているわけじゃないのだ。リオがセレナを捕まえに来た天使でなかったのは良かったが、花火に関しては安心というよりもため息が出てしまう。

まだほかの天使に見つかったことはなかったが、セレナは逃亡者でしかもうとまれていた

存在なので追われていないとは限らない。わざわざ人間のふりをしているのです、見つからないとは思いますが、万が一ということもある。

「じゃ、はじめようか。色んな花火があるから、飽きるということはないさそうだね」

水無は無言で頷いた。

まだ太陽は完全には沈んではなかったが、暗くなってきたので花火が出来ないということはないだろう。

「だから、あんたが来ることを許した覚えはないってば。勝手に私の花火に触るな」

「まあ、いいじゃん。セレナは心が狭いなあ。そんなんじゃモテないよ?」

「大きなお世話だ!」

水無はそんな二人の言い合いの様子を後ろから見ていて、眼を丸くした。

こんな師匠見たことない…。

水無は今までにこころも感情をあらわにしたセレナを、見たことがなかった。

ぐーたらとしているか、本当はいくつなんだと言いたくなるような子供じみた言動をするか、悪魔退治の時に偶に見せる不敵な笑みくらいしか水無はセレナの表情を知らない。

…多分、それだけこのリオという幼馴染の天使を信頼しているということなんだろうけど。

たまに来る悪魔退治依頼の客なんかには、猫を被りまくるセレナなのだ。幼馴染ということでも気安くもあるのだろう。全て憶測ではないが、信頼しているからこそ本音をぶつけられるのかもしれない。

「まあまあ。そんなに怒るなって。そんなに怒鳴って、喉疲れない?」

「誰の所為だよ!」

「そりゃあ、セレナの」

地響きかと思う地を這うような轟音に、水無は思わず耳を塞いだ。ぐらぐらと地面が揺れているような錯覚まで引き起こし、水無はその場に座り込んでしまう。視線を上げると、空中に黒い巨大なもやのようなものが、この轟音を発しているんだと分かった。

「……………悪魔か……………」

セレナの押し殺したような声が、微かに空気を震わせる。音は止んだのだが、まだその残りがすが耳の中を侵食していて、耳鳴りみたいに頭の中でコダマする。

セレナはちつと舌打ちして、悪魔を睨みつけた。まさかこんな所に悪魔が出るとは、思っていなかったからだ。

悪魔とは人間や天使なんかの感情をもつものが出す、負の感情そのものことだ。恨みや嫉妬、憎悪なんか寄り集まり、魂を中心に形にならない形になって現れる。天使の仕事は、その負の塊のみを浄化し、魂を回収することだった。

悪魔の生まれ方は様々だが、意思がある限り感情がなくならないのと同じように、悪魔もいなくなることはない。特に負の感情というのはなくそうと思っても、なかなか無くならないものなのだ。

「…ふーん。よーやくのお出ましか。　セレナ、どうする?」

リオが特に焦った様子もなく、訪ねてくる。まるで最初からここに悪魔が現れることが分かっていたみたいに。

シイがこくと頷くと、黒猫の姿が一瞬にして溶けたように崩れた。そしてそのまま黒い幕のようなものになったかと思うと、もやの塊である悪魔に包み込むように巻きついた。

両手に収まるぐらい小さく圧縮された悪魔からは、悲鳴がぴたりと止んだ。

「へえ…。悪魔を包むなんて、すごいね」

リオが素直に感嘆の言葉を漏らした。

元々使い魔は悪魔と大差ないモノで、実体がない。天使が名前と誓いを立てて契約することで、初めて実体を得られるモノなのだ。

天使が悪魔に名を与えることによって、悪魔は使い魔と名を変え自我を得ることが出来る。使い魔となったモノはそれに感謝の意味を込めて天使が立てた誓いを守り、それが果たされるまで天使に尽くす。そして契約が果たされれば自由の身になり、その生を全う出来る。元々悪魔だったモノも使い魔になれば暴走することがないので、天使も浄化することはしない。

よく出来ているな、とリオは思う。

元は天使が自分の手足となって動くモノが欲しかったために編み出された方法なのだろうが、いつの間にか悪魔のために作られたような制度に代わっていた。存在していても自我がないと不安定になる悪魔のために、天使が自我を与えてやっているなどと言い出す天使もいるくらいだ。

「ふん。傲慢にもほどがあるな」

実際間違っではないのだが、だからといって天使が使い魔より格上の存在ということにはならないはずだ。あまりものを言う使い魔は多くないので誤解されやすいのだが、使い魔だつて必ずしも感謝しているとは限らない。人も天使もいちいち格付けをしたがるが、そもそもそれは何の意味があるのだろうか。

「そんなことをしなくても、世の中常に弱肉強食なのにねえ。
メル」

リオが独りごちて、自分の影に呼びかける。

「はい」

すると影の中から、若干かすれた声が返つて来た。
リオはセレナと悪魔に視線を向けたまま、若干早口で命じる。

「セレナにもしもの時は、いけ」

「かしこまりました」

そう言うとメルと呼ばれた影は、気配を消した。

「……さて、あの方はいったい何をお考えなのやら」

リオはそうつぶやくと、悪魔とは反対方向の空中に向けてシニカルな笑みを浮かべたのだった。

夏のある日 (2) (後書き)

かなり載せようかどうか迷いました。

「茨の国のアリス」を見て下さった方は分かると思いますが、この話はメインとなるものが他にあつて、サブとして書いた話です。

しかも(徹夜の入った)二日間で書き上げたという色々と残念な感じになっています。なのにまったく手直しなしで載せています。

次で一樣「夏のある日」は最後ですが、最後はなんだかもうグダグダな感じになってしまいました。

ですが手直しする体力はもう残っておらず…すいませんorz…。とりあえず、ここまで読んでくれた素晴らしい精神の持ち主の方に感謝して近いうちに載せたいと思います。でわでわ…。

夏のある日 (3)

「セレナ。これ、そんなにもたないから早くして」

悪魔に巻きついたシィから苦情が飛んでくる。

「分かってるって。シィ、合図したらどいてね」

「言われなくても」

セレナは炎の玉を集め、さっき出したよりも数倍はでかい炎の玉を形成し、不敵に笑った。

悪魔を浄化させるには特定の魔法陣があるのだが、それを今当てる
とシィごと浄化してしまう。なので、シィが押さえているうちに弱
らせておこうという作戦だった。

幸いにも今回の悪魔は炎が効くようなので、楽に倒せそうだ。

「シィ！」

「はいよー！」

息びつたりの掛け声とともに、炎の玉が悪魔に向かって飛んでいく。
やっと圧縮を解かれた悪魔は、ゆっくりとそのもやを拡大していく
最中だった。

「！ セレナ、危ない！」

「え」

シイの声に反射的に上を見上げたセレナの視界には、頭上からたくさんの炎の玉が降ってくるのがはっきりと映った。

「 っつー！」

とっさに避けたのだが左腕にかすり、刺すような痛みが襲ってきた。

「…！師匠！」

なるべくセレナたちの邪魔にならないようにと距離をとっていた水無が、思わず叫んだ。

セレナは笑顔を作って水無の方に振り返り、ひらひらと手を振る。

「だーい丈夫だよ、水無。そんな泣きそうな顔しないの」

「なっ、そんな顔してません！」

「はいはい」

軽口を叩きながらセレナは振り返り、悪魔を睨む。
どうやらさっきセレナが放った炎の玉は、あの悪魔に跳ね返されたらしい。

「同じ手は二度通用しないってことか」

ならばとセレナが身構えた時、ぼんつと気の抜けた銃声のような音が、空気を震わせた。

「へ？」

セレナがその音のした方に目をやると、ひゅるといふ音とともに、空中に赤い花が散ったところだった。

「あーあ」

少し離れたところで、リオがそう言ったのが聞こえた気がした。
火薬臭い花の群れはとどまることを知らずに、次々と咲き続ける。

「……………う……………そ……………」

セレナは茫然と呟いた。

さつき炎の玉を弾き返されたことで火が付いたであろう筒状の花火は、勢いよく空に投げ出され綺麗な花を散らしていく。十個中八個が空でチリと化した時、セレナの中で何かがブチ切れた音がした。

「このっ…！ふざけんなあああああああああああああ！」

怒声を上げながら、セレナは素早く悪魔を浄化する魔法陣を完成させる。その目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

そして今まで特に動きのなかった悪魔に向かって、その魔法陣を放つ。

ゲオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオ！

魔法陣が悪魔に触れた瞬間、悲鳴とも雄叫びともつかない叫び声を残して悪魔は一瞬でかき消える。そして後にはぼんやりと輝く小さな玉と、かなり小さくなった黒いもやが残された。

セレナはゆっくりとそれらに近づく。シイも黒猫の姿に戻っていて、白い羽をパタパタと

動かしながらセレナに続いた。

「シィ、リングを」

セレナに言われシィは尻尾から金色に輝くリングを外し、セレナに渡す。

呪文のような文字が刻まれた指輪ほどの大きさのリングを、セレナは黒いもやの近くにかざす。すると空中に漂っていたもやが、そのリングに吸い込まれるようにして、消えた。

「終わったね」

シィが赤い目をすぼめて、呟くように言った。

「 師匠！怪我は……！」

水無が救急箱を持って、セレナに駆け寄って来た。多分セレナが戦っている間に店の中に取りに戻っていたのだらう。急いで戻って来たのか紫に近い髪は汗ばみ、浴衣も少し乱れていた。

その姿にセレナは思わず微笑してしまった。自分を心配してくれたという事実が何だかおかしくもあり、くすぐったくもあつたからだ。

「だーい丈夫だって。さっきも言ったでしょ？放っておけば治るか
ら」

「何を言っているんですか！切り傷じゃないんですよ？火傷はすぐ

に冷やさないと…！」

「大丈夫だって。かすり傷だから。大したことないよ」

「でも、師匠…！」

「俺も彼女に賛成だね。そういうのは甘く見ちゃいけないよ」

追いつがる水無に見かねたりオが、助け船を出してやった。

「……何よ、リオには関係ないでしょ」

「そうかもね。でもそれは手当てを断る理由にはならないよ。今ここで俺に治療されんのと、彼女に手当てしてもらつのとどっちがいっ？」

「……水無」

「はいじゃ、決まり」

そう言つてリオは水無の肩を軽く叩き、手当てを促す。

「あ、ありがとございませう。…ほら師匠、手を出して下さい」

「……………」

セレナは言われた通り、渋々腕を差し出す。本当は即席の手当てになっってしまう水無よりも、能力で傷を癒せるリオの方がいいのだが、セレナはそれを選ばなかった。

…だって、なんか悔しいし。

「……さて、と」

セレナがおとなしく手当てをされている横をすり抜け、リオは浄化された悪魔の残骸、つまり未だ空中に漂っている魂の元へと歩みを進めた。それは弱い光を放ちながらも、消えることなく浮いていた。

「さつきは、ご苦労さま」

リオがセレナたちに聞こえないように、自分の影に向かって呟く。

「いえ」

影からは短い返答。先ほどセレナが魔法陣を完成させる時に悪魔が動かなかったのは偶然ではなく、メルが影に潜みその動きを止めていたからだったのだ。

「まあ、俺の助けなんかなくたって、セレナは大丈夫だったろうけどね」

そう言つて自嘲気味な笑みを浮かべながら、リオはぼんやりと輝く光の玉に手を添えた。
すると一瞬光の玉が明確な光を浮かび上がらせ、リオを包んだ。そして次の瞬間にはもう、光の玉は何処にもなかった。

完全に日が沈みきつた空の下で、セレナはがっくりと肩を落とした。

裏庭に置かれていた筒状の花火は全て打ち上がり、その無残な残骸だけが地面に散らばっていた。他の花火もそのとばつちりを受けたのか、すでに燃え尽きてしまっているものが多かった。

「まあ、仕方ないですね。日ごろの行いが悪かったと思って、諦めてください」

水無の言葉はにべもない。

「ああ……私の……花火……」

「仕事もしないでそうやって遊び呆けようとするから、天罰が下ったんですよ。これを機に、改心して下さい」

「……………」

「?…師匠?」

「そつだよ！無くなつたらまた買えばいいんだよ。別に世界中から花火が無くなつた訳じゃないんだからね！燃えてしまったのなら、また買い直せばいいだけのことじゃないか。ね、水無くん?」

「……………」

目をキラキラと輝かせ、満面の笑みで水無に詰め寄るセレナ。

……やっぱり人の話を全然聞いてない…。

水無は頭痛のする頭を押さえながら、深い深いため息をこぼした。

「ね、いいでしょ？水無。ね。ね。」

子供っぽいしぐさで甘えた声を出す三百歳。水無は頭の中でおもちやをねだる子供を想像して、頭痛が酷くなるのを感じた。そのうちお母さん、なんて呼ばれたらどうしよう。

「もちろん、ダメに決まっています」

「ええー！どうしてさー」

セレナが不満の声を上げるが全を無視して、水無は夕飯の準備をするためさっさと家の中に入って行ったのだった。

「ちえ、意地悪」

水無が聞く耳も持たず家の中に入って行ってしまったので、残されたセレナは口を尖らせた。せっかくの休暇だというのに悪魔は現れるし、楽しみにしていた花火は燃やされるしで、散々な一日だった。もし神様がいるんだったら、ノイローゼになるくらいまで罵倒し尽くしてやりたい。

「あれ、シイがない……」

預かったままだったリングを返そうと思って探したのだが、その姿は見当たらない。もう家に入ってしまったのだろうか、ぼんやり考えながら金色のリングを手の中で転がす。

裏庭には外灯がないので辺りは薄暗い。見えないほどではなかったが、この暗闇ではあの夜色の姿を探すのは大変だろう。

「まあ、いつか。…さて、明日はなんて言って休もうか」

きつと家に入ったんだろうと決めつけて家に戻ろうと足を向かわせかけた時、ふいに背中に視線を感じてセレナは振り返った。

「……なんだ。まだ居たの」

セレナの顔があからさまに歪む。

「まあね。セレナの百面相は面白いからつい」

クスクスと笑いながらもセレナに近寄ってくるリオ。服が全体的に白い所為か、リオは薄暗い庭の中では何だか浮いて見えた。

「花火も全滅したんだし、リオも早く帰れば？つーか早く帰れ。そ

して二度と戻って来るな」

「…さつきの子、水無って言ったっけ。彼女には俺が見えてたね」

「人の話を聞けよ」

「天使や悪魔が見える人間は少ないから、彼女は珍しいよね」

「……………」

「あ、じゃなきゃ弟子なんかにはしないか」

リオはまあそうだよねと一人で納得して、うんうんと頷いている。

セリナはその頭めがけて花火の残骸を投げつけた。

リオはこれを難なく避ける。

「まあまあ、そんなに起こらないですよ。せつかくいいもの渡そうと思っただから」

「……………何よ」

「ほら、これ」

ほい、と差し出された手に乗っていたのは、水色の綺麗な十字架のネックレスだった。

「あつ…！」

セレナの手は無意識のうちに自分の胸元へと移動する。さっきまで付けていたはずのネックレスは無くなっていた。そしてリオの手には、まさにそのネックレスが乗っていた。

「なんだ。てつきりそこに落ちてたから、捨てられたんだと思ってただけだ…。その様子だと、さっきの悪魔と戦った時にでも落としたのかな。……もしかして、毎日付けてるの？」

「なっ…！んなわけないでしょ！付けるわけないじゃない！あんたからもらったものなんて」

セレナは伸ばしかけた手を引っ込め、反射的に憎まれ口をたたく。実は毎日付けているのだが、そんなこと本人の前で（もちろん本人じゃなくても）言えるわけがなかった。

「たまたま袂に入ってたのが落ちたんでしょ。別にいらなから、拾わなくてもよかったのに」

セレナは視線をうろろさせながら、必死に言いつくろつ。水無の時はそうでもないのに、リオの時は何故かそれがうまくいかない。

「ぶっ…ん」

少しの間意地の悪い笑みを浮かべていたリオだったが、おもむろにセレナの近くに來たかと思うと、ひょいっとセレナの首にそのネックレスを引っかけた。

「ちょっ…何すんのよ」

「まあせっかく拾ったんだし、付けてなって」

そう言うとりオはそのまま自然な動作でセレナの左腕に触れ、あっという間にさっきの傷を治してしまった。

「こっちはおまけ。うん。これでよし」

「何がいいのよ。勝手に触んな！」

あまりの行動の自然さに若干反応が遅れつつも、セレナはリオの手を振り払い後ずさる。

顔がいつもより近いせいもあってか、薄い肌の色や整った顔立ちがよく見えた。

心臓が異常な速度で動いていて、何だか息苦しい。熱でもあるんじゃないかというぐらい顔が

熱くなっていくので、軽くリオを睨みつけておいた。

やっぱりリオといると腹が立つ…！

きつとリオとは相性が悪いのだろう。だからこんなにもムカムカするのだし、顔が熱くなるのだ。セレナはそう自分に言い聞かせ、だからリオが悪いんだと再度その綺麗な顔をねめつけた。しかしリオはセレナの予想に反してにっこりと笑い、何がおかしいのかクスクスと笑いだした。

「……………何なの」

セレナの顔がますます歪む。

「いや、そういうところは相変わらずだなと思って」

「……………は？」

リオは楽しそうだったが、セレナの困惑顔は深まる一方だった。

……………なんなんだ、こいつ。

「気づいてないならいいよ。セレナはホント、顔に出るよね。まあ今日はこれで帰るから、俺の言ったこと考えてみればいいよ。じゃあ、また来るから。 じゃあね」

「え、ちよっ」

それだけ言うと、リオはくるりと回れ右をしてさっさと飛び去って行ってしまった。
後にはぽつんと、セレナだけが残される。

「……………何、どういう意味よ」

謎の言葉だけを残し飛び去って行ったリオの後ろ姿に、セレナは茫然と問いかける。
もう影も見ない空からは、当然返事が返ってくるわけもなく。

（にしても、何がしたかったの？私を困惑させて、面白がっていただけ…？）

セレナにも答えは出なかった。

「あいつの考えてることは、意味分かんない…」

ひっそりとつぶやいた言葉は夜の生温かい空気に吸い込まれて、誰にも届かずに消えたのだった。

夏のある日 (3) (後書き)

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。そしてお疲れ様です。

続きは気が向いたら書こうかななんて思っています。

なので一様完結にはしてません。

でもいつになるかは分かりません。

まあ、気長に待っていて下さると、有難いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2764h/>

喫茶店セレナ

2010年10月25日10時55分発行